

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

第五十五卷 第一號

昭和十七年七月

論叢

南方農業に於ける勞働力の問題……………經濟學博士 八木芳之助

佛印に於ける貯蓄及資本に就いて……………經濟學博士 松岡孝兒

ナチスの貨銀保護政策の原理……………經濟學士 中川與之助

資本形成の意義……………經濟學士 中谷實

實物的波及過程の彈性分析……………經濟學士 青山秀夫

研究

協力工業の技術的向上と再編成……………經濟學士 田杉競

成果學說の理論的根據……………經濟學士 尾上忠生

說苑

大島貞益の譯書及岡田好樹……………經濟學博士 本庄榮治郎

「經濟之理」について……………

シエーパースの國土計畫論……………經濟學士 上杉正一郎

附錄

彙報

說 苑

大島貞益の譯書及岡田好樹

の「經濟之理」について

本庄 榮治郎

一

(イ) 大島貞益が明治前期における國家主義經濟學者として最も注目すべきものの一人なること、並にその思想及び著譯書については、既に本誌第五十二卷四號(昭和十六年四月)に於て述べた所であるが、茲には若干その後の調査によつて判明した點を補訂したいと思ふ。

(ロ) 大島貞益の執筆にかゝる論稿は、その後發見したものの若干がある。例へば東京經濟雜誌第五四七・五四八號(明治二三年)に石華陳人の名を以てせる「日本古來の金銀の相場」は確に貞益の執筆せるものであ

り、また西田長壽氏の調査によつて、同誌第六六九號(明治二六年)の「内地雜居論」、讀賣新聞第四九七六號の「我國海關稅は租稅にあらずとの說に就て」及び第五〇三一號の「條約改正中止論(何れも明治二十四年)等の存することが明かとなつた。猶この外にも幾多論稿の存することが考へられるが、それ等新聞雜誌上の論稿を集成して刊行される計畫が西田氏によつて進められつゝある趣であるから、他日その全貌が明かになることと思ふ。

(ハ) 「馬爾丟斯人口論要略」の原著については、既に述べた如く、竹村豐太郎、内藤越夫兩氏の研究によつて「The Elements of Social Science: or, Physical, Sexual, and Natural Religion」 by a Graduate of Medicine, 9 ed., enlarged, London, 1871. 其 Part II Sexual Religion に屬する Essay on the Principle of Population, by the Reverend Mr. Malhus と題する一章であること、並に原著の初版題名は Physical, sexual and natural Religion: by a Student of Medicine, Lon-

don 1855 であることが明かにされた。然し譯書には原書とその版數が明記してないから果して九版本であるか否かが明かでなく、後述の四版本と對校しても、内容上その抄譯と見ても差支なき如き感があつたが、最近京都帝國大學附屬圖書館所藏の「版權書目第二號」に明治九年十月分として

附記してをく。

(ニ) 大島貞益の譯書に「百科全書 回教及印度教佛教」があることは前に述べたが、その原著名は明かでない旨を記した。然し百科全書の第一冊の例言によれば、百科全書は William and Robert Chambers の Information for the People を翻譯せるものであつて、九十二

西洋千八百七十一年著

原著「エレメント」オフソシアルサイアンス

馬爾丟斯人口論要略 小本一冊

西洋形

譯者 大島貞益 東京府平民

出版人 有吉三七 京都府士族

右の如く掲げられてゐることが判明し、一八七一年版のものが翻譯原書であることが一層明確となつた。わが京都帝國大學には、右の九版本は收藏してゐないが、四版本(一八六一年)はマイアー文庫中の一冊として所藏されてをり、また財部文庫には十五版本(一八七七年)がある。後者には二七七頁の處で約二頁に亙る増補があり、著者名が A Graduate of Medicine ではなく A Doctor of Medicine となつてゐることを

大島貞益の譯書及岡田好樹の「經濟之理」について

篇に及んでゐることが明かとなつたから、右の原著はいふ迄もなく同書であり、それは當時我國に於て廣く讀まれたものであるといふ。そののみならず右の百科全書には、更に次の二冊が何れも大島貞益の翻譯として收められてゐることを知り得た。即ち

百科全書 土工術 一冊 明治十年 文部省印行

本書は橋梁・道路・運溝・鐵道・海濱土工の五項より成る。四六判一一四頁。

第五十五卷 一一五 第一號 一一五

百科全書 北亞米利加地誌 一冊 明治十年 文部省印行
地形並に地質・水利・氣候・植物・動物・人口・邦國・
魯領亞米利加・英屬亞米利加・加納多・ノバスコツチ
ア・ニューブリュンスウイツキ・プリンスエドワルド
島・ニューハウンドランド・グリーンランド・合衆國
・墨西哥より成る。四六判一六頁。

而して右の百科全書は單行本の外、十年五月乃至十三年九月に四六判二十一冊として合本發行されたが、土工術は第五冊、北亞米利加地誌は第十五冊、回教及印度教佛教は第十六冊に收められてゐる。更に十六年十月乃至十八年一月に丸善商社から四六倍判十二冊外に索引一冊として復刻されたが、土工術は上卷第二冊、北亞米利加地誌は中卷第四冊、回教及印度教佛教は下卷第一冊に掲出されてゐる。

二

(イ) 大島貞益の譯書に米國ケアリーの著 Principle of Social Science が「加禮氏厚生學」として存すること、それは明治十七年乃至二十一年に大養毅によつて

譯出刊行された「圭氏經濟學」と同一原書によつたものであることは既に述べた所である。然るにケアリーの著書は既に早く明治七年六月に岡田好樹によつて「經濟之理」として紹介されてゐる。このことは既に布川孫市「田口博士と明治の經濟學界」(東京經濟雜誌第一八三五乃至一八三七號)大正五年一月乃至二月によつて明かにされた所であり、その後私も「アダムスミスと日本」(大正十二年六月大阪朝日新聞に掲載)大正十四年十月の増訂改版經濟史考に收載)にこの書名を掲げておいたが親しく同書を見る機會を得なかつた。然るに此度帝國圖書館長松本喜一氏の好意によつて之を見ることが出来たので茲に若干同書のことについて述べたいと思ふ。

明治七年六月新鐫	岡田好樹譯 經濟之理 有果齋藏版	
----------	------------------------	--

(ロ) 「經濟之理」は菊判和装の活字本で卷一及二の二冊を存する。その表紙裏には上掲の如き記載があるが、奥付はな

い。明治時代の文獻を取扱つたもの、又は明治初期經濟思想史に關する著述にも本書のことを記してをるも

のは、前掲布川氏の論稿の外には、殆んど見當らぬので、全部で何冊刊行されたものか、またはこの二冊だけで中絶したものか、その邊は明かでない。本書の「題言」の一節には「本朝始テ英國ニ公使館ヲ置キ寺島全權公使ヲ派遣ス予書記ヲ以テ隨行シ館務ノ暇博ク彼ノ人民ト相交リ今日ノ富強ヲ極メタル實況ヲ目撃シ退キテ諸大家ノ著述ヲ讀ミ以テ其ノ之ヲ致シタル原由ヲ研究シ將ニ纂輯スル所アラントシ頃者米里堅人嘉禮氏編述スル所ノ經濟全書ヲ讀ムニ至リ其理允當其論明確ニシテ予カ宿夙思想セシ所ト其趣意全ク相符合ス爰ニ於テ諸書ニ涉獵スル事ヲ止メ專ラ此書ニ從事シ繙譯以テ纂輯ニ代ント欲セリ然レモ卷帙浩濶議論繁雜ニ涉ル所アルヲ以テ今其煩瑣ヲ省略シ精英ヲ採拾シ以テ梓ニ上ス固ヨリ一班ヲ舉ゲテ全豹ヲ遺スノ譏リハ免レ難キヲ知ルト雖モ然レモ一熱菓地ニ墜チテ天下ニ新智ヲ開クノ偉功アリ此區々譯書ノ如キモ世又タ幸ニ紐氏ノ才

大島貞益の譯書及岡田好樹の「經濟之理」について

アルニ逢ハ、豈裨益ナントセンヤ」とある。以て著者の意圖する所を知るべきである。

「經濟之理」卷之一は題言二枚、本文三十三枚で「人生ヲ論ス」「人間ヲ論ス」の二項目より成り、卷之二は二十六枚で「空費ヲ論ス」「物素地位ニ由リテ變化アルヲ論ス」の二項目を説いてゐる。之をケアリーの原著と對校するに、卷之一は原著第二章より第八章まで、卷之二は第九章より第十一章までの抄譯である。即ち原著の約三分一の要旨が記されてゐるに過ぎないから卷之三以下續刊されたものかとも想像されるが今それは明かでない。尤右二冊の範圍内に於ても各國それぞれ事情を説き、その隆替消長に稽へ、里加鐸・西密等の説を批判せる部分もあり、自由主義經濟學に對するケアリーの論旨の一部は既に明かである。

(ハ) 維新以來幾多の西洋經濟學に關する書籍が翻譯されたが、その多くは自由主義經濟學であつた。然し保護主義に關するものも決してなかつたわけではなく、若山儀一の「保護稅說」の如き明治四年に執筆さ

れたものであるが、その附録は明かにケアリーの所説を紹介したものであつた。また英のバイルズの所説も明治十年に同氏の「自由交易穴探」によつて紹介された。岡田好樹譯「經濟之理」は「保護稅說附録」に遅るゝこと數年であらうが、明治十七年に犬養毅によつて紹介されたよりも、抄譯とはいへ、十年も早く公にされてゐることは注意すべきことであると同時に、譯者自らが保護主義に共鳴して本書を抄譯したことも特記すべきことであらう。而して大島貞益が同じケアリーの著書を翻譯せるのみならず、獨のリストの經濟學を明治二十二年に「李氏經濟論」として公にしたことは既に述べた如くである。

私は自由主義經濟學の華かなりし明治前半期に、以上の如き保護主義經濟學の紹介されてゐたことを思ふにつけ、從來閑却されてゐた「經濟之理」を、大島貞益のことを記述するに當り、全然無關係のことでもないで、一言附記した次第である。